



Title	サン=テグジュペリの亡命における 二律背反の不可避性について
Author(s)	高實, 康稔
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学篇. 1992, 32(2), p.111-123
Issue Date	1992-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/15295
Right	

This document is downloaded at: 2019-03-26T04:46:42Z

サン＝テグジュペリの亡命における 二律背反の不可避性について

高 實 康 稔

Réflexion sur l'Antinomie inéluctable de l'Exil de Saint-Exupéry

Yasunori TAKAZANE

はじめに

サン＝テグジュペリは、1940年12月、アメリカ合衆国に亡命した。「戦う操縦士」Pilote de guerre、「星の王子」le Petit Prince、「ある人質への手紙」Lettre à un Otage、そして未完の遺作となった「城塞」Citadelleの大半は亡命中に書かれた。すなわち、彼の主要な作品の半分以上が短期間の亡命時代に集中的に書かれた。この亡命という異常な事態とその生活環境がサン＝テグジュペリの思想や人生観に何ら変質を迫るものでなかったことは、これら亡命中の作品が如実に証明している。彼の思想と行動を律する基本理念は、亡命によってより強固になったとさえいえることをわれわれは知っている。しかし、そうであれば尚更、《なぜ彼は亡命の道を選んだのだろうか》という疑問が、彼を愛する読者の脳裡をかすめたとしても不思議ではない。とりわけ、「ある人質への手紙」を読めば、《彼自身なぜフランスに居残ってレジスタンスに加わらなかったのだろうか》と疑問に思うのは、むしろ自然なことであろう。逃避や待機主義が彼の生き方を決定したとは考えられない。また、生命の危険を避ける緊急避難でもなかったことは事実である。さりとして、その場しのぎの安易な選択であったとは、これまた信じ難いことである。傑作を遺し、また作品を通してアメリカの世論に影響を与えた一種の「栄光」ともいえる滞米生活の中で、彼がいかに耐え難い精神的苦痛を抱き続けたかをみれば、それは明らかであろう。亡命は、彼にとって、選択の岐路に立たされた末の苦渋に満ちた《行動》であったに違いないのである。

今日、サン＝テグジュペリの亡命を咎める論調があるわけではない。しかし、一方、

彼の亡命に至る経緯を真剣に論じて、その行為を積極的に弁護もしくは評価する論調もまたみられない。多数の伝記や回想、解説書の類は事実の表面的な言及に留め、亡命に踏み切った彼の心境と決断を重要な論点としてとりあげようとはしない。全集や個々の作品の解説にいたっては、この点に関してほとんど触れてもいない。要するに、彼の亡命はその事実のみが単純に示され、動機や背景についての考察は乏しいのである。それは、一つには、彼の亡命後の《行動》の悲劇をたどることによって間接的に「正当化」の説明になりうるからであろうが、実はそれだけの理由からではなく、一種の極限状況の中で亡命の選択と決断を余儀なくされた者に対して、その是非を問うこと自体苛酷だと配慮が底流にあるのではないかと思われる。しかし、サン＝テグジュペリにおける行動と文学の緊密性、ひいてはそれを支配している倫理性に注目すれば、結果論的な正当化や情状酌量的な好意では片づけられない何か割り切れないものが、いわば根源的な問として残るのは避けられないであろう。それは、サン＝テグジュペリであるが故に、他の多くの作家や芸術家と同列には論じえない必然的な問といってもよい。

この疑問に答えることは果たして彼の名譽を損なうことになるのであろうか。否、この疑問を軽視して解明を避けることこそ誤解の温床にもなりかねず、その方がいっそう不名譽なことといわなければならない。この点に関して彼自身は、作品、論説類はもとより、「手帳」Carnetにおいてすら直接的には何も語ってはいないが、それは恐らく弁解めくからであり、好意的な配慮を望んだ結果だなどとは到底考えられない。安全地帯にいるすべての亡命者は所詮《人質》と対等な当事者たりえないと随所に述べて、配慮には拒絶さえ示しているのである。従って、亡命の真意を率直に問ひ解明を試みることは、単に読者の心にわだかまる疑問を解くためばかりではなく、サン＝テグジュペリの人と作品のより深い理解と、彼の名譽の曖昧にされてきた部分に対して正当な評価を下すことにも寄与するであろう。更には、亡命後の短い人生をより深く理解する鍵もここにあると思えるのである。

結論からいえば、サン＝テグジュペリは、米国での活動と祖国に「人質」を残すという二律背反を十分に認識した上で、敢えて亡命の道を選択し決断したということができよう。苦悩に満ちた奥深い彼の思想と行動の跡をたどれば、亡命の選択に挫折や逃避の形跡を認めることは困難であるばかりか、祖国の解放と人間の尊厳の獲得にとって、より有効な犠牲的献身の方途として亡命に踏み切ったものと思われるのである。しかし、やがて訪れる国内レジスタンスの高揚を十分に予測してはいなかったにせよ、ともあれ「人質」を危険にさらしたまま旅立つのであってみれば、当初から後悔がつきまとう苦渋の決断であったと推測される。それは、いわば避け難い自己矛盾とさえないものであった。要するに、サン＝テグジュペリの亡命に関する考察には、「亡

命への疑問」から結果として見えてくる不可避的な二律背反の所在と、二者択一としての亡命の意図の解明が是非ともなされなければならない。

なお、本論は前者のみを主題としており、後者については稿を改めて論じることを断っておきたい。

I 亡命への疑問

読者が抱く「亡命への疑問」は、占領下において次第に高揚していった国内レジスタンスの中にサン＝テグジュペリの名を見い出しえないことにも漠然と向けられるものであるが、より明瞭に示されるのは、亡命中の彼の作品や記事、更には評伝や研究者の解説類に接してのことである。ここでは例として3点を取り上げておきたい。

1. 「星の王子」について

他のいかなる作品よりも人々にサン＝テグジュペリを親しい存在とした傑作ではあるが、注意深い読者であれば、この作品が亡命中に書き描かれ、「人質」の身の親友レオン・ヴェルト Léon WERTH（ただし幼年時代の彼を想定して）へ捧げられたものであることを見逃すことはない。「この大人の人はフランスに住んでいて、飢えと寒さに苦しんでいます」¹⁾という献辞の一節は作者の親友と祖国に寄せる心情をよく物語っており、この献辞によって子どもたちに何か大切なものを伝えたい様子が窺える。読者は、しかし、この献辞がユーモアを含みながらも切実であればあるほど、ここで作者の亡命の意図をさぐりたい心境にとらえられる。そして、それは明確には納得が得られぬまま、ついにナゾとして心の片隅に残るのである。

2. 「ある人質への手紙」について

この「手紙」もレオン・ヴェルトに宛てられている。控え目ながら亡命の動機を感じさせる言辞や亡命者の役割に触れた箇所もあるけれども、「手紙」を締めくくる最後の一言「君たちは聖者だ」²⁾ほど強烈に読者の心を打つものはなく、この表現に当時のサン＝テグジュペリの最も深い思いが込められているといえよう。「おびやかされ、危うい君の姿が目浮かぶ。さらに一日生きのびるために、50才の身を引きずりながら貧しい小店の前の歩道を幾時間も往き来する君の姿、擦り切れた外套に身を包み、一時凌ぎの避難場所で震えている君の姿が目浮かぶ。あれほど根っからフランス人なのに、君は人の倍も死の危険にさらされていると思う。君はフランス人であ

る上にユダヤ人だからだ³⁾とレオンの身を案じ、また、「君たちはわれわれ亡命者の考えなんか吐き捨てるだろう。われわれはフランスを築いてはいない。フランスに奉仕できるだけだ。たとえどんなことをしようと、われわれには感謝される権利なんかない。自由な身の闘いと夜の弾圧との間には共通の尺度はあり得ないのだ⁴⁾と4千万の人質に全面的な優位性を与えるサン＝テグジュペリの真情に接するとき、感動と同時にやはり《なぜ亡命したのだろうか》という疑問が湧いてきてもやむをえまい。なお、この「手紙」については「二律背反」の所在を示す主要な根拠として次章において詳細に論じている。

3. ロジェ・カイヨワの「序文」について

サン＝テグジュペリに関する多数の著作の中でも、ロジェ・カイヨワ Roger CAILLOIS がプレイヤー版全集の序文として著した「サン＝テグジュペリ論」は小論ながらサン＝テグジュペリ文学の本質を鋭く解明し、近・現代フランス文学におけるその特異な存在の価値を称賛をもって示したものとして名高い。しかし、この論文においても、「文学を文明の道具として捉え」⁵⁾、「芸術にではなく、人生にエネルギーの主要な部分を費やし」⁶⁾、「行動の結果を立証するためにしか書かなかった」⁷⁾ サン＝テグジュペリは、「行動だけでは不十分な行動の人」⁸⁾ であって「本来の文人とはいえない」⁹⁾ と述べながら、人生最大の岐路ともいふべき亡命については一言も触れていない。とりわけ、義務や責任や倫理を背景とした次のような箇所に出会うとき、亡命という《行動》に対するカイヨワの理解ないしは解釈のありようを尋ねてみたくなるのであるが、最後までそれを見い出すことはできない。

「彼の書は、休息よりも努力を、楽よりも苦を、安全よりも危険をむしろ選ぶようにと教えている。」¹⁰⁾

「彼は人々を啓蒙するために行動の意味と範囲について書いている。人々を不和にするものは何か、それは投げ込まれる穀物であり、たちまち争いが始まると言う。人々を結びつけるものは何か、それは求められる任務の遂行であり、任務が人々を協同に導くと言う。(中略) 物質や機械の法則に劣らず確固とした精神の法則、風の変化や気象の不確かさ以上に曖昧かつ複雑で掴み難いのにすぎない精神の法則を、どうにかして人々に分からせようと努めている。人間の生来の自由が精神界のことを全く予測できなくしてしまうのである。しかし、精神界においても、物質界におけるのと同様に、広くて究めづらい厳密性が支配しており、結局はすべてが発見さ

れ、何もかも失われることはないのである。」¹¹⁾

II 二 律 背 反

敗戦と被占領という極限状況にあったとはいえ、サン＝テグジュペリの亡命は最初から一種の二律背反を内包するものであった。それは極限状況によってかえって深められる性質の矛盾でさえあった。亡命前の作品、「夜間飛行」Vol de Nuit および「人間の土地」Terre des Hommesによって、彼の行動と文学における緊密性はすでに不動のものとなっており、しかもその行動は特定の極限状況の中で展開され、そこに人生の意味を発見するという極めて倫理性の高いものであった。行動主義作家と呼ばれた所似である。戦争や敗戦という極限状況と夜間飛行やサハラ砂漠のそれとを同一次元に置くことはできないけれども、極限状況における、もしくはそれがもたらす生存や行動の倫理という面はやはり等しく残るといふべきであろう。

「はじめに」において述べたように、結論からいえば、サン＝テグジュペリはこのことを十分に認識した上で、敢えて亡命を決断したものと考えられる。亡命のもつ二律背反を認識していただけに、絶えず倫理的な苦悩から逃れられなかったといっても過言ではあるまい。その二律背反とは具体的にどのようなものであったのか、本章ではそれを「ある人質への手紙」と、「フランス人への手紙」Lettre aux Françaisを手掛かりとして究明してみたい。

1. 「ある人質への手紙」から

レオン・ヴェルトへ宛てる形を採りながら、すべてのフランス人に、また、アメリカ合衆国の国民に、亡命者の立場から率直な心境を語ったこの「手紙」は、逆境にある祖国を去った者が余儀なくされる非当事者的立場を謙虚に認めることに重点が置かれ、亡命の動機や自己の果たすべき役割をことさら強調するような態度はもとより見られない。しかし、亡命の動機・意図らしきもののささやかな表明や、世界戦争の帰趨の鍵を握る米国でサン＝テグジュペリが任務として自覚していたものの表明が少しも見い出せないわけではない。例えば次のような記述がある。

「ぼくは激烈な戦争から抜け出してきたところだった。ぼくの空軍部隊は、九ヶ月間ひっきりなしにドイツ上空を飛び続けたが、ドイツ軍の猛攻撃をうけるたびに、搭乗員の四分之三を失っていた。帰国してからは、今度は奴隷状態の陰鬱な雰囲気と飢餓の恐怖に苛まれた。町を包む闇夜の中で生きる外はなかったのだ。」¹²⁾

「だからぼくは自分に言い聞かせていた、『大切なのは生きる糧としてきたものが心のどこかに残っていることだ。慣習でも、家族の祝典でも、思い出の家でもよい。大切なのは帰ることを目指して生きるということだ』と。」¹³⁾

「もしぼくが戦い続けるならば、少しは君のために戦うことになるだろう。あのほほ笑みにまた会える日が来ることを本当に信じるためには、君の生存が必要なのだ。ぼくには君が生きていくのを助ける必要があるのだ。」¹⁴⁾

「ぼくたちはみんなフランスに属している、一本の木に属しているように。ぼくは君の真理のために尽くすだろう、君もできることならぼくの真理のために尽くしてくれたに違いない。この戦争において、ぼくたち国外にいるフランス人が問題としているのは、ドイツの存在という雪が凍りつかせた種子の貯えを解放するということだ。君たち、向こうにいる君たちを救うということだ。君たちの根を張る基本的な権利がある土地で、君たちを自由にすることだ。」¹⁵⁾

これらの表白によってサン＝テグジュペリの亡命の動機・意図の一端を垣間見ることができけれども、これらは亡命の全面的な正当化を主張しようとするものでは決してなかった。「人質」は「聖者」であり、「人質」から遠く自らを引き裂いた亡命という行為に由来する不安な魂の存在に絶えず立ち向かわなければならなかったからである。己を引きつけてやまない「磁極」pôleの存在、必ずそこへ帰っていきたい「磁極」を持つかぎり、人は逃亡者ではありえないとさまざまに論じているところに不安な魂の存在を見ないわけにはいかない。それは亡命と逃亡を明確に区別する必要に迫られた一種の自己検証とでも理解すべきであろう。かけがえのない「磁極」の一つがレオン・ヴェルトであるということはいうまでもないが、「ぼくを支えている遠い磁極の危うさが、ぼくの本質そのものを脅威に陥れているような気がしていた」¹⁶⁾と言って「磁極」の安否を気遣う彼は、経由地リスボンで遭遇した多数の亡命者 *réfugié émigrant* を「根のない植物」¹⁷⁾、「帰るべき家もない放蕩息子」¹⁸⁾と評して、自己との相違を際立たせ、「旅行者でありたい、亡命者にはなりたくない」¹⁹⁾と思うのである。そして遥か彼方のニューヨークにたどり着いても、レオンの生存を祈りの中で信じえたときはじめて、「自分は亡命者ではなく、旅行者なのだと思うことが許される」²⁰⁾と言う。それは、砂漠の中にも「目には見えない、生き生きとした筋肉組織」²¹⁾が張りめぐらされているように、友の存在が《旅行者》としての彼の存在を密かに繋ぎとめているからである。親友の背後に「一つの肉体」²²⁾としてのフランス、「心の中のさまざまな傾きを創り出す磁極の総体」²³⁾としてのフランスがあることは

いうまでもないが、要するに彼は自己を《旅行者》だと位置づけ、隷属と飢餓に覆われた故郷を後にして、虚飾に満ちたリスボンを目の当たりにしたとき、友に象徴される苦境のフランスが「かけがえのない存在になり始めた」²⁴⁾と述懐することを避けられないのである。

旅行であれ、亡命であれ、サン＝テグジュペリをそれに踏み切らせたのは、戦争という暴力によって人間の尊厳が根底から破壊された状況においてであった。時代の荒波の渦中に生きる者として、人間の尊厳を、人間の精神を回復させることに貢献しなければならないことを過度なまでに自覚していた彼を知れば、貢献の手段の一つとして亡命の道を選んだと考える外はないであろう。この点については、別稿において論ずる予定であるのでこれ以上言及せずにおくが、ここで重要なのは、この亡命という道が彼の最も基本的な思想である《人と人を結ぶ絆》の切断にも一見みえるということである。心の絆がいかに強くあろうとも、また、別離は心の絆を真実いっそう強める性質のものであろうとも、自らも「人質」のままに時代の困難と闘うもう一つの道は放棄したことになる。ここに彼の心痛む二律背反があった。

逃亡者ではなく強力な磁極をもった亡命者が、「手紙」の中で最も強調するのは人間に対する尊重ということである。そして、人間に対する尊重とは、政治や宗教や思想の対立を超えて、いかなるときにも人間を人間として受け入れることができる態度のことであり、それが現実生活の場で表現される象徴的な姿をほほ笑み *sourire* に見い出している。本来、「人間とは精神によって支配されるもの」²⁵⁾であり、精神にとって本質的なものはしばしば何の変哲もないほほ笑みであると言う。苦悩から解放され、「確信と希望と平安を与えてくれた」²⁶⁾ 忘れえぬほほ笑みの一つは、他ならぬレオンと見知らぬ二人の船頭を仲間に引き入れての昼食のひとときがもたらしたものであった。スペイン内乱のときに危機一髪テロリストから逃れる契機を生み出したほほ笑み、ほほ笑みこそは「言語を、階級を、党派を超えて」²⁷⁾ 人々を結び、「同じ教会の信者」²⁸⁾ にする。「真のよろこびは会食のよろこびだ」²⁹⁾ と言うのも、会食 *convive* には「陽光にも似たほほ笑みの平和」³⁰⁾ があるからであり、会食とはともに生きるよろこびに外ならない。

しかし、「昨日の真理」³¹⁾ が保障していたこの《ともに生きるよろこび》は今や望むべくもない。「今日、ぼくたちの上昇の条件であるこの人間に対する尊重は危機に瀕している。現代の世界を覆っているさまざまな軋みがぼくたちを暗黒の中に投げ込んでしまった。問題は混沌としていて、解決策も矛盾し合っている。昨日の真理は死んだのに、明日の真理はまだ建設中なのだ。有効な総合は何も見えてこないし、一人ひとりがばらばらに真理の一部分を握っているのにすぎない」³²⁾ からである。時代の暗黒のなかで、明日の真理の建設のためにサン＝テグジュペリがとった「解決策」は、

決断された亡命を前提とするものであった。けれども、亡命はそれ自体、原初的な意味で《ともに生きる》ことを不可能にし、その上、「人質」に「精神的な炎をもたらすのはぼくたち（亡命者）ではなく」³³⁾、「まさしく君たちこそぼくたちに教えてくれる人々」³⁴⁾であるという「人質」のもつ師としての優位性は絶対的なものであった。亡命という「解決策」の選択が却って激しく「人質」への犠牲的な献身を余儀なくしていった側面を否定できないにしても、「人質」の優位性から逃れられないところに亡命の宿命的な二律背反があり、犠牲的な献身への高揚も一面ではこの避け難い二律背反がもたらした心理的作用の結果といえるであろう。

「ある人質への手紙」には、全体主義やナチズムや党派性に対する明確な批判がみられる。「ぼくたちは肥育される家畜ではない」³⁵⁾、「ナチストは創造的な矛盾背反を拒絶し、上昇への一切の希望を破壊し、千年間でも人間のかわりに白蟻のようなロボットを作り続ける」³⁶⁾、「何故われわれは同じ陣営にありながら憎み合ったりするのだろうか」³⁷⁾、「論戦や排斥や狂信には全くうんざりしている！」³⁸⁾といった言葉にそれを見出すことができる。また、反面、「アメーバを人間にまで導いた生命の巨大な働き」³⁹⁾という「全世界の善意」⁴⁰⁾について語り、「ぼくたち人間は横柄な態度をとるときでも、心の中では密かに気づいているものだ。ためらいや疑いや悲哀に…」⁴¹⁾と党派性を脱しえたときの人間美についても語っている。そして、なお上昇の過程にしかない人間の未来は、誤謬と矛盾を「成長のための腐食土」⁴²⁾として築かれる外はなく、「新しい真理が準備されるのはいつも暴虐の地下室の中においてなのだ」⁴³⁾と歴史の残酷な一面に対する認識を示しながら、来るべき夜明けへの期待を表明してもいる。しかし、これらの批判や人間観の表明は、「人質」への忠誠の証としてなされたものであって、亡命の正当化や思想的弁護を内包するものでないことは自明のことである。連合軍のアフリカ上陸（1942年11月6日）以降、2/33部隊への復帰を志願して奔走していたことに触れてはいないのも、自己弁護と受けとられることを恐れたからであろう。それほど「人質」は神聖な存在だったのである。

2. 「フランス人への手紙」から

連合軍のアフリカ上陸、フランスの全面占領という新局面を迎えて、急速、新聞（ニューヨーク・タイムズ・マガジンなど）に掲載されたこの「手紙」は、「ある人質への手紙」（1943年2月）に先立って書かれたものであるが、あたかも後者の続編かのように、冒頭に「人質」の絶対的優位性が強調されている。

「われわれは、明日ドイツが銃殺する人質の名前すら知ることができないである

う。……かなたフランスには、奴隷の境遇にたえている四千万人の人びとがいるのだ。かれらに心の灯をもたらすことは、われわれにはできない。……かれらはわれわれよりもみごとに、フランスの諸問題を解決するであろう。……われわれはどこまでもへりくだらなければいけない。……われわれはフランスを代表してはいない。奉仕することしかできないのだ。なにをしようと、どのような感謝をも要求する権利はない。……かなたフランスの人びとこそ、まことの聖者なのである。たとえ、つぎの戦いに参加する榮譽をになったとしても、われわれが負債をおっている事実にかわりはない。われわれは一たばの債務証書にすぎない。この根本的事実を、まず認めなくてはいけない。」⁴⁴⁾

この「手紙」は、国外のフランス人に和解と団結と従軍を訴えたものだけに、「ある人質への手紙」よりいっそう厳しく亡命者のとるべき立場が説かれている。同時に、亡命者の「奉仕」の役割、一兵士として従軍すべき役割が明確に示されている。それは亡命中堅持した自立的・非政治的態度に関する立脚点の表明であるばかりでなく、亡命者には亡命者の役割があるのだということをより強く力説したものと見える。その意味では、亡命の一つの「理由書」とみることもできよう。「だれしもフランスを救うことを希っていた」⁴⁵⁾のだし、「抵抗がどのようにおこなわれるべきだったか、判断のくだせる人が実際にいるだろうか」⁴⁶⁾、当然ながら「フランス国内でも抵抗の努力はつづけられてきた」⁴⁷⁾が、亡命者たちの間でもナチスの恐喝の残虐性について意見を異にしていなかったのだから、再び出発点に戻って考えるべきだと言う。党派や組織、指導者の反目や意見の違いから互いに相手の「不正」を咎めるようなことはやめて和解すべきだ、なぜなら「侵略者にたいする共通の憎悪」⁴⁸⁾が不動であるかぎり「懸念するほどの不正などありはしない」⁴⁹⁾し、「わたしは驚くべきことに、どのような不正にたいしても、ゆるぎない自信を身うちに感じている。だれがわたしに不正な態度をとることができるだろう」⁵⁰⁾と言う。要するに、「錯綜した諸問題、矛盾にみちた陣容、誠実と欺算、無気力と勇気を道づれに」⁵¹⁾ヴィシー政権が消滅した今こそ、初心に帰って和解し共通の敵と戦うべきだというサン＝テグジュペリの懸命な呼びかけの中に、彼の亡命の目的をもうかがい知ることができよう。少なくともこの時点において、それは、二律背反の明瞭な認識のもとに、「なにをおいてもフランス」⁵²⁾のために「奉仕」することであったのである。このことは別稿のテーマとするところではあるが、その際、「フランス人への手紙」は解明の一つの鍵となるものである。

なお、この短い「手紙」においてヴィシー政権に対する評価問題が相当な分量を占め、「威嚇が合法的に存在していた。ドイツの恐喝はなさけ容赦のないもの」⁵³⁾だと、

「対独協調の精神は糾弾」⁵⁴⁾ できても、対独協調を一概に卑劣よばわりはできないとしている。政治的反目の渦の中で、ヴィシーの回し者という疑いをかけられていたにも拘わらず、ヴィシー政権に対する「批判者の役割は歴史家や戦後の軍法会議にゆだねるとしよう」⁵⁵⁾ と、「ゆるぎない自信」をもってひたすら大同団結を訴えたところにサン＝テグジュペリの偉大さが偲ばれることを付記しておきたい。

Ⅲ 疑問を残す解説書

サン＝テグジュペリの「亡命への疑問」を解くために、作品や全集の「解説」のページをめくってみても、読者には敗戦から半年後の亡命の事実が示されるのみである。これでは敗戦と亡命の何らかの因果関係を空想することはできても、内面の真実にまでは到達しえない。迫害を逃れての緊急避難ではなく、また、ド・ゴールの「呼びかけ」に応じたものでもないとするれば、占領とヴィシー体制下での早急なレジスタンスや作家活動の不可能性が亡命を決断させたのではないかと推測してみたり、多数の戦友を失った無残な敗戦による「挫折」が決定的な要因ではないかと疑わせたりするのが落ちである。ルポルタージュ、時評、手帳 Carnet、遺稿などのすべてに目を通せばこれらの推測や疑念の当否について自分なりの判断を下すことができるに違いないけれども、よほどの愛好家にでもない限りそれを期待することは無理であろう。従って、「触れずにおく」のではなく、やはり解説者の「解明の一言」が望まれるというべきである。さもなくば、亡命の一事をもって、彼自身、「情宣活動の棚の上にジャム壺のようにおとなしく座っていて、戦後になってから食べてもらおうと奥に控えている知識人たち」⁵⁶⁾ とどこか一脈相通するような印象を与えてもやむをえないであろう。

確かに、数多い評伝類の中には、亡命に関して相当克明な状況分析を行い、その目的についても一定の推論を試みているものもある。ピエール・シュヴリエ Pierre CHEVRIER 著「アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ」(Gallimard) や、マルセル・ミジョ Marcel MIGEO 著「サン＝テグジュペリ」(Flammarion) などがそれである。しかし、これらもいくつかの点で不満なしとせず、近く別稿において論述するつもりであるが、ともかく今のところ翻訳がなく、一般の読者には縁遠い存在といわざるをえないのである。

本章では、サン＝テグジュペリの人と作品に関する二つの解説書を取り上げ、その中で彼の亡命がどのように「解説」されているかをみることにしたい。

1. ルネ・ドランジュ René DELANGE 著「サン＝テグジュペリの生涯」
(Editions du Seuil 1948 ; 山口三夫訳, みすず書房 1963)

「従軍パイロット」の章の末尾に「八月に動員解除になったサン＝テグジュペリは、「ラマルティニエール号」でフランスに帰って来る。かれはフランスにながくはとどまらないだろう」⁵⁷⁾とあり、次の章「亡命」の冒頭には、「北アフリカから帰国したサン＝テグジュペリは、マルセーユで船をおり、アゲーに住んでいるかれの家族、母親、姉と義兄、およびその子供たちのもとへおもむく。かれはついで、合衆国へのパスポートのヴィザをとるために、ヴィシーへ行く。(中略) ヴィシーから、通行許可証なしで、かれは十月第二週のはじめにパリへ来て、友だちのうち避難からもどって来た人たちに再会するため三日間パリにとどまる」⁵⁸⁾と足どりを追っているのであるが、帰国から亡命までの心理状態に対する著者の考察はみられない。次いで、出発前にレオン・ヴェルトに会いに行き「朝から晩まで、二人はフランスを引き裂いている原因についてはてしない論議をかわす」⁵⁹⁾とあるにも拘わらず、その論議の内容については一言も触れていない。そして、米国での行動をたどる中で、「《かれは侵略されるのを見た、とピエール・ド・ラニユクスが書いている、かれは自分の上をドイツの武力が通りすぎるのを感じた、かれはまだ自分の体内にいっさいを押しつぶしたあの仮借なき猛攻撃のショックを感じつつづけているのだ。——かれはまだフランスに課せられた外的な諸条件を手にしていないがゆえに、まだ勝利に最大の確率を付与するという計算はしていなかった。かれが見ているのはただ、真珠湾がまだ起こってはいなかったかなりうわのそらのアメリカだけである》。だが、そのときから、かれはP・ド・ラニユクスに言っている。《ヒトラーが支配することになるような世界には、ぼくのいるべき場所はないよ》」⁶⁰⁾という一節は、「猛攻撃のショック」が原因で亡命したが、次第にナチズムと闘う決意を固めていったという風にしか読みとれまい。

2. アルベレス R. -M. ALBERES 著「サン＝テグジュペリ」
(Albin Michel 1961 ; 中村三郎訳, 白馬書房 1970)

「動員解除になって、サン＝テグジュペリは南フランスに戻り、それからパリに戻るが、パリには四日しかいなかった」⁶¹⁾と外面的な動きを素描し、砂や熔岩や海といった自然の物理的な脅威とは異質の人為的な脅威にさらされている《人間》の現実を前にして、「彼にはもうフランスでは生活できなかった」⁶²⁾と簡単に結論づけている。いかなる政治的派閥からの誘いをも拒んだことに触れて、「彼の心のうちなる祖国、普遍的なるもの、それは政治的派閥などよりずっと広大なものだ」⁶³⁾からだとして述べて

はいるが、それは単に政治からの超克を説明するものにすぎない。従って、「彼は四年間、フランスにおいても、また移住先においても、この葛藤に苦しみつづけることになろう」⁶⁴⁾と解説するのにとどまるのである。「1940年末、彼はリスボン経由でヨーロッパを去る」⁶⁵⁾が、ポルトガルでの「瞑想は、もはや一旅行者の瞑想ではありえない。それは『ある人質への手紙』なのだ(中略)こんどの航海は、どんなにかものものしい出来事に感じられることだろう。彼の愛する文明の実質、血、肉は、すでに彼から遠いものとなっており、病苦の床に、救いの手もなく、診てくれる医者もないまま、うち棄てられているのだ。彼がいとおしく思っているこの肉体的存在から、すでに肉体は欠落している。残っているのは、ほのかな香りだけ、すなわち微笑だけだ」⁶⁶⁾と続けていることから、あくまでフランスに心を残した移住であったことは十分に察せられるけれども、その動機・意図については依然として不明のままにおかれている。そして、「どこか別の世界へ退かなければならない。彼は政治を知らない。ぶしつけな政治的手段というものを彼は好まない。(中略)彼は子供たちに話しかけることになるだろう」⁶⁷⁾と、滞米中の活動としては唯一「星の王子」の執筆についてのみ語っているのである。「星の王子」の解説自体は文明と精神の明証 *évidence spirituelle* の再建のために原点に立ち帰る必要を痛感していたサン＝テグジュペリの理解に役立つとしても、これでは、「数々の思い出を秘めた家へ、幼年時代のデッサンへ、汚れを知らぬ精神のものものしい思案ぶりへ」⁶⁸⁾ 戻ることと執筆活動こそが亡命の意図であったかのように受けとられよう。「彼の全生涯を見れば明らかなように、彼は自分を忘れるすべを知っていた。そして、このことの意味は実に大きい」⁶⁹⁾ という解説に至っては誤解すら招きかねないであろう。

註

- 1) A. DE SAINT-EXUPÉRY, *Œuvres* (B. de la Pléiade), Gallimard, 1959 p. 407 (Lettre à un Otage) (本書は以下 *Œuvres* と略記する)
- 2)・3)・4) *Ibid.*, p.405
- 5) *Ibid.*, p.xii
- 6) *Ibid.*, p.xiii
- 7) *Ibid.*, p.xiv
- 8)・9) *Ibid.*, p.xii
- 10) *ibid.*, p.xvii
- 11) *Ibid.*, p.xviii
- 12) *Ibid.*, pp.390-391
- 13) *Ibid.*, p.393
- 14)・15) *Ibid.*, p.405
- 16) *Ibid.*, p.393

- 17) Ibid., p.391
- 18) Ibid., p.392
- 19) Ibid., pp.391–392
- 20) Ibid., p.396
- 21) Ibid., p.394
- 22)・23)・24)・25) Ibid., p.395
- 26) Ibid., p.398
- 27)・28)・29) Ibid., p.402
- 30) Ibid., p.405
- 31)・32) Ibid., p.403
- 33)・34) Ibid., p.405
- 35)・36) Ibid., p.402
- 37) Ibid., p.403
- 38) Ibid., p.404
- 39)・40) Ibid., p.397
- 41) Ibid., p.401
- 42) Ibid., p.403
- 43) Ibid., p.405
- 44) サン＝テグジュペリ著作集 6 「人生に意味を」(渡辺一民訳, みすず書房 1968) pp.208-209
- 45) 同上書 p.209
- 46)・47) 同上書 p.210
- 48) 同上書 p.211
- 49) 同上書 p.212
- 50) 同上書 p.213
- 51) 同上書 p.211
- 52) 同上書 p.207
- 53) 同上書 p.210
- 54) 同上書 p.209
- 55) 同上書 p.211
- 56) Œuvre p.287 (Pilote de Guerre)
- 57) サン＝テグジュペリ著作集別巻 (みすず書房 1969) : ルネ・ドランジュ著「サン＝テグジュペリの生涯」(山口三夫訳) p.119
- 58) 同上書 p.120
- 59) 同上書 p.121
- 60) 同上書 p.129
- 61)・62)・63)・64)・65) アルベレス著「サン＝テグジュペリ」(中村三郎訳, 白馬書房 1970) p.186
- 66)・67) 同上書 p.187
- 68)・69) 同上書 p.188

(1991年10月31日受理)